

七―七四)のみにみられ、<sup>\*</sup>南北朝最末期の流行とみとめられること、これに反して雲岡・龍門・石窟等の初期の交脚彌勒像には往々寶冠に化佛がみられ、むしろ

『上生經』の記載に合致することなどが注意される。

\* 水野「開皇二年四面十二龕について」(東方學報、京都第十一册第一分)一二八頁。

\*\* なほ彌勒下生の像名のみえるものは天統三年邑主韓永義等合邑諸人造七佛寶龕記(大村西岸氏『支那美術史彫塑篇』三三八頁)武平五年董崇雲等造彌勒下生像記(同書三五二頁)などがある。

## 驚 婚

今かりに辭典などにつき「婚」の項の類語例を見るならば、結婚といふものゝ種類が如何に多くあるかといふことが知られるであらう。例へば、當事者の年齢を標準としていふものに、早婚・晩婚あり、その經驗の有無より見れば、初婚・再婚(現實では三婚、甚しきは數婚を重ねるものもあるが)あり、法律上禁止せられてゐる重婚あり、身分關係の上では上層階級の婦女の卑賤者に嫁ぐ降婚あり、之と關聯して、いはゆる金爵

結婚と呼ばれる賣婚・財婚あり、或は天子諸侯の大婚、親類の間柄で結ぶ連婚、更に特異なものとしては、死亡せる許婚者を合葬する冥婚等、洵に様々であるが、此處にするす驚婚も亦その特殊の一例として數へてよからうと思ふ。

すなはち五代の逸話など輯めた五國故事(宋代撰者不明)の後蜀の處に「後蜀を建國した孟知祥の歿後、その子昶位を嗣いだか、若年であつたので、生母と同居して居た。其の後數年を経て、新しく宮殿を造營して遷り住んだが、宮宇や、宏きに過ぎたので、民間女子の殊色ある者を索めて、以て之を充たさんとし、有司がこれらの美女を引いて後苑に至るや昶は親らその佳色の者を選び、諸侯にも賜つた。そこで民間では、この美女徵發に大恐慌を來たし、適齡期の子女を有する親達は、周章て、媒酌をもとめて嫁がしめた。これを驚婚と謂つた。」とある。此の場合、驚といふ言葉に千金の面白さが感ぜられる。當今、子女の婚期の一日も遅れざらんことを望んで、その賣込みに奔走する人士も、亦蓋しこの類ひではなからうか。(岡本)